

論文

Kenneth Waltz のメタ理論的考察とその哲学的批判

椿 井 真 也*

1. 問題の所在と梗概

1-1. 社会科学の理論としての国際政治理論を取り上げる理由

科学哲学からの見方として、社会科学も「科学」を標榜する以上、理念的には自然科学と同一の原理に従うべきとする見方がある一方で、社会科学と自然科学はその研究方法において決定的な違いが存在し、理念的にも自然科学と同一の原理に従うべきとする考えは誤りであるとする見方が存在する¹。

本稿で取り上げる対象は、Kenneth Waltz の国際政治理論である。社会科学とされる諸学問の中で国際政治理論を対象とする理由は、社会科学の中でも後発の国際政治理論が経済学や社会学などの諸々の社会科学の諸要素を取り込むことによって構成され²、特にミクロ経済学との類比によって理論構成を図った Waltz をはじめとして、Robert Keohane や Alexander Wendt などの様々な理論家の営為において、以下の困難に対してきたからである。すなわち、ある事象の説明のための設定された仮説の形成に関する確証過程に関して共通理解が見られず、したがって、ある類型のデータの範囲内ですら競合する仮説間の区別が困難であり、競合的仮説が経験的現象について異なる含意を持つことが往々にしてあるので、どの仮説がどの程度適切であるという点についても検証手段すら持たない現状である。このような現状では、ある理論に対してどの程度の信頼性をおいてよいのかわからず、常に基礎づけの強迫が働いていた。国際政治理論の学的条件を探究するメタ理論を本稿が主題化するの、こうした事情ゆえのことである。

1-2. 問題の所在と行論の順序

国際政治理論に限局して論じるとはいえ、主要な見解のすべてを取り上げることは紙幅の関係上難しい。そこで本稿では、国際政治理論の中でも特に方法論上の諸問題にコミットし、かつ大きな潮流を形成している Waltz のネオリアリズム (neo-realism) の理論が依拠する前提に陰に陽に含まれる一定の科学哲学的見解とその問題点について検討することが目的となる³。

本稿の行論の順序は以下の通りである。まず、① Waltz の理論内容を概観した上で、当該理論の依拠する科学哲学上の見解を抽出することから始める。② Waltz の依拠する見解は、19 世紀以降、自然科学と同様に社会科学も「科学」として成立するには実証主義 (positivism) という根本原理を共通して持っているべきとする多数派の見解に合致し、なおかつ道具主義 (instrumentalism) 的な見解として理解されており⁴、理論自体が近似的にであれ世界の真なる描写となっているとする実在論の立場には与しないとの見解に立つ点で、理論と世界との関係につき、科学哲学上の議論における反実在論的な立場にある⁵。その一方で、観察された事実についての命題の真理性については否定していない。この点において、観察命題の真理性の承認と理論全体に関する道具主義的立場を両立させることに特徴を持つ Bas Van Fraassen の構成 (主義) 的経験論 (constructive empiricism) と親和的であり、その意味

キーワード：実証主義、科学的実在論、国際政治理論、ケネス・ウォルツ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度3年次転入学 生命領域 日本学術振興会特別研究員(DC2)

で実証主義と位置づけられるには相応の理由があることを確認したい⁶。③とはいえ同時に、一概に反実在論として済ませない要素を併せ持つことを指摘する。むしろ、これまでの学説史研究上の評価に反して、理論についての実在論までの強度な実在論までは含意せずとも、操作的介入や実験的検証によって因果連関等が再現的に確認しうる理論的对象についての実在を承認する Ian Hacking や Nancy Cartwright らの「緩やかな実在論⁷」や、理論的对象の実在性ではなくむしろ観察不可能な物理的世界の構造の実在性を主張する John Worral や Steven French 及び James Ladyman らの構造実在論 (structural realism)⁸ といった様々なバリエーションを持つ科学的実在論の諸見解に共通する側面が強調されるべき旨を主張したい。④ところが、実在論的側面をも併せ持つ Waltz のメタ理論は、対象レベルの理論内容におけるユニットレベルの分析の捨象へと結びつくという規定関係を持っていることを論じる。つまり理論をどう捉えるかという Waltz のメタ理論の抱える問題点が、そのまま対象レベルとなる理論内容の問題点となっているのではないか、という主張である。

2. Waltz の理論とその科学哲学的主張の検討

2-1. Neo-realism の理論的概要

Waltz のネオリアリズム (neo-realism) 理論は、また構造的リアリズム (structural-realism) とも称されている。国際関係において同種の条件で同種の結果が反復されている現象が存在するとの認識を前提に、国際関係の構造の一貫性を抽出する⁹。

ここで Waltz が指摘する一貫性を持った特性として取り上げるのは、「アナーキーの特性」である。この「アナーキーの特性」が国際関係における反復の理由を説明するとされる。古代ギリシアから現在に至るまでの貫歴史的な「アナーキーの特性」は、たとえユニットが都市国家から帝国そして国民国家へと変化しようと、ユニットそれ自体の対立が絶えず存在する。かかるユニット間の対立関係において反復されるパターンが「バランス・オブ・パワー (balance of power)」とその崩壊である。

Waltz は、このような基本的事実認識に基づき、彼のいう「理論」を用いて国際政治状況の非還元主義的説明を企図する。Waltz 以前に見られる理論は、国際関係を社会心理学的要因や国家の政治的特性あるいは指導者の属性やその他経済的諸要因などといった部分の属性とその相互作用を分析することによって理解しようとする方法を採ってきた。例えば、ある集団の行動を当該集団の構成員の心理学的分析を通して説明する試みや、国家官僚及び官僚組織の分析によって国際政治を理解しようとする試みが、典型的な還元主義的方法として挙げられる。しかし Waltz によると、「理論」とは、単なる観察によるデータの収集や経験からの帰納によっては因果関係の理解は不可能との認識に立脚した一定の指針による組織づけられた情報の有機的知識体系である。全体を知るためにそれを構成する部分の研究に還元する還元主義的な方法を採らず、彼のいう「システム論」的方法を採用するのである。結果が変数の属性及びその相互作用のみならず、変数が組織されている方法にも影響を受けることがありうるからである。ユニットの組織化状況が当該ユニットの行動及びその相互作用への影響力を持つならば、システムのユニットの特性・目的・相互作用を知るだけでは結果を予測したり理解することはできない。すなわち、ある結果をもたらすエージェントの変化にもかかわらず同様な結果が生じる場合に還元主義的方法では説明が難しいということである。具体的には、国家のいかなる政策的意図とは関係なく、常に同じ結果が生じる場合、国家の属性・意図・相互作用は説明原理たりえず、意図や属性を超えた要素が国家の行動の制約要因として働いているとの推論が働く。そのシステム特有の制約要因が「アナーキーの特性」だということである。

構造とはシステムレベルの構成要素である。これによって、単なるユニットの集合ではない、ひとつのセットを構成するものとして、ユニットを考えることが可能になる。もう一つのレベルでは、システムは相互作用するユニットからなる。¹⁰

システム論的方法の目的は、このシステムレベルと相互作用するユニットレベルという二つのレベルの作用機制及び区別基準を明確化することにほかならない。構造の定義からユニットの属性及びユニット間の関係は排

除されねばならず、かくして一つの構造の別の構造への変化すなわち構造それ自身の変化と同じ構造の中でユニットの相互作用の変化が区別される。

Waltz は、国際関係においてシステムレベルに作用する要因によって結果を説明できるという。この説明とは、①予期された結果の一定範囲内への収束、②行動パターンの反復、③出来事の反復の理由を説明することである。システムの構造は、制約要因として一定の方向性を付与する力としても作用する。そしてシステム内における継続性を説明し、予測を可能にするというのである。

Waltz は、社会科学の理論とは説明と予測の力を付与する理論でなければならない、よりよい理論とは、当該説明及び予測がより高度の一般性を有する理論である、と主張する。システム論的方法による理論は、異なるユニットの同様な行動の原因及びユニットごとの差異に関わらない予期範囲内への結果の収束を説明する。対して、ユニットレベルでの理論は、システム内における様々なユニットの異なる行動原理を説明する。

2-2. Waltz における理論・法則・事実

このような枠組みを持つ Waltz の理論に対して、Waltz 自身どのような位置づけをしていたのか。Waltz は、事実と理論を区別する。事実は真偽に関わる問題であるが、理論は真偽ではなく説明能力こそが問題である。いくらデータを収集したところでそれ自体が我々に何か知らせるわけでも、観察や経験だけで因果関係が理解されるわけでもなく、何らかの指針によって必要な情報を集め、情報を組織化し、一つの知識の体系とする必要から理論が要請される。したがって、理論は帰納による結果とはなりえない¹¹。

理論は、また法則とも区別される。法則とは変数間の（確率的）関係を確立するものである。もし理論を特定の行動や現象についての法則の束ないしは集合であると考えれば、Waltz が指摘する通り、一定の確率的法則の下では、例えば有権者の特徴といった独立変数と政党選択といった従属変数との間のより高い相関関係を見つげられることになり、理論は多少とも法則より複雑ではあっても単なる量的な意味における複雑さに他ならず、理論と法則との間の質的差異は存在しない。もちろん、相関係数の二乗をとれば、確かにバラツキの一定の割合が読み取れ、数学的にその規則性を説明することができそうである。しかしながら、そこから直ちに真の因果関係が判明したと考えて独立変数と従属変数との関係が定立しえたと即断することはできない。なぜなら、実際のところは点と点の間にひかれた回帰曲線にすぎないことが忘却されているからである。

相関自体は数学的計算の結果の数値に他ならず、それ以上の意味を出ない。そこからいかなる関係性が推論されるかは別種の問題を構成することが気づかれない。Waltz が用いた例で言うならば、ある人の手押し車を押す力の量と手押し車の動く量とを関係づけ、ある法則を提起したとして、確立された関係性は事実として観察され有効な法則であるとはいっても、その押す力と動きの関係についての説明は、どの理論を参照するかによって異なる¹²。

このように帰納主義的方法で推し量る限界は、我々が問題の断片しか扱えないことになる点である。断片を足し合わせ、その総和が従属変数の一定の動きを説明する独立変数として取り扱えるわけではない。なぜならば、我々は何を足し合わせるべきかも知らず、また足し合わせるのが適切なのかも知らないからである。問題の一部として扱いうる断片は無数に存在するとも言えるし、断片を組み合わせる方法も同じく無限に存在する。観察において対象や組合せを無限に扱うことなど不可能である¹³。

Waltz は、理論を法則の束として考えず、その質的差異を強調する。理論は帰納からは構築されず、描写に加えて理論的概念を含む。この理論的概念は発見されるより、むしろ発明されるというのである。

理論は、法則とは質的に異なる。法則は不変の関係性、もしくは確率的な関係性を同定する。理論とは、これらの関係性がなぜ存在するのかを示すものである。ある法則のなかの個々の描写は、観察的もしくは実験の手続きに直接結びついており、法則は観察か実験による検証に合格して初めて構築される。一方、理論は、描写に加えて理論的概念を含んでいる。理論が帰納だけから構築できないのは、理論的概念が発見されるものではなく発明されるものだからである。¹⁴

Newton が、等速直線運動を説明するために導入した質点、瞬間加速度、力、絶対空間、絶対時間といった理論

的概念は、観察や実験によって直接確定することはできないにもかかわらず、このことに関して決して理論的誤りを犯したわけではないのは、仮定そのものは生の事実を主張するものではないからである。仮定は真でも偽でもない。理論的概念は、それをを用いる理論が有効な場合に正当化されるのである¹⁵。

2-3. Waltz の理論の道具主義的側面と実在論的側面

上記の立論から、Waltz は理論が世界の実在を描写するものであるとは考えず、むしろ説明のための道具であるとする哲学的立場にコミットしていることは明白である。加えて Waltz の理論の背景にある科学哲学的前提として実証主義が指摘されてきたのも¹⁶、実証主義という幅広い含意を持つ諸見解に共通して見られる以下の点が含まれているからである。すなわち、実証主義の背景となる経験論は、独立の実在を断片的に否定するという仕方ではなく、むしろ実在の概念に重きを置かず、我々が知り得るのは我々の観察や行為の集合のみであるという事実を前提にする。例えば、知覚には原因があり、それゆえにかかる原因の担体である独立の実在を考えてしまう傾向は、常に必然的誤謬を伴うとまでは断言せぬまでも、少なくとも純粋な論理的要求ではなく、誤謬の危険を増大せしめ、また当該誤謬を予め察知することが困難であることを強調する。かくして実証主義は、現象を直ちに独立の実在に帰すことを科学的手続きの上で正当化され難い主張とみなす。基本概念の定義を様々な可能な操作の同値類に言及するか、またはそのようにして意味が定義された他の概念に言及することによって、観察された事象についての命題群を組織化し、ある規則を見出すことによって過去の観察に基づいて、将来行われる実験結果のいくつかを予言できるようにする。

ところで、van Fraassen の構成的経験主義は、科学理論に対する意味論的実在論を採る点及び理論語と観察語の二言語モデルを採用しない点で論理実証主義とは一線を画すものの、経験論を背景とする広義の実証主義を支える哲学的見解であると考えられる。

科学の目標は、われわれに経験的に十全な理論を与えることであり、一つの理論の承認に信念として含まれるのは、それが経験的に十全だという信念だけである。これが、私が擁護しようと思う反-実在論的立場のテーゼである。それを、構成的経験論と呼ぶことにする。¹⁷

構成的経験主義は、科学の目的を近似的真理への漸近とするのではなく、経験的十全性 (empirical adequacy) に求め、当該理論から導出可能な観察可能領域についての主張の正当化を通じた観察可能な「現象の救済」を企図することこそが科学の目的であるとする。

観察可能な現象を当該理論が記述する構造に定式化することで説明が図られる。その前提には、観察可能なものと不可能なものとの区別を承認するとともに、かかる区別を言語の性質ではなく対象の区別に帰せしめていること、更には観察の理論負荷性を認めていることが挙げられる。

このような見解は、詳細に亘って同一というわけではないにせよ、核心部分において上記 Waltz の理論が含意する科学哲学的見解と親和的である。科学理論につき意味論的な視点からは実在論的な見解を持っている一方で、理論は現実をそのまま描写するのではなく、あくまで説明と予言のための装置にすぎないと考えていることから、認識論的な視点からすれば理論に関する反実在論の見解を有している点¹⁸が第一に指摘される。それと同時に、観察された事実に関する命題の真理性については承認するという点と、観察評価が理論負荷的であることを前提にする記述をしている点を併せ持つことから¹⁹、先の構成的経験主義と極めて類似した見解を有していると言えるのである。

ところが、理論と世界についての描写の関係について、先述の通り理論は文字通りの世界の実在の描写ではなく、説明と予言のための道具である点で、少なくとも理論については反実在論的な立場を採る実証主義者として多くの論者²⁰から理解されてきた Waltz の理論は、Waltz 自身も意識していないものの、実在論的な側面を併せ持つことを論定したい。

なるほど、実在論といっても複数のバリエーションを持つので、まずここでいう「実在」論とは、観察可能な物的対象の意識からの独立性を主張する常識的実在論という意味での「実在」ではないことを断っておきたい。知覚されていない事物の存在を認めない George Berkeley に代表される観念論 (idealism) に対抗する実在論ではなく、

科学理論の対象の存在論的身分に関わる科学的实在論のレベルでの「实在」である。

とはいえ、科学的实在論の中でも複数のバリエーションが存在し、最も強度な主張である科学的实在論は、直接観察することが不可能な理論的对象の实在性はもちろんのこと、成功している理論は、そのものが世界の描像と考える立場である。何度も確認した通り、この意味での实在論を Waltz は否定する。しかし、科学的实在論の中には、成功した科学理論にとって不可欠な観察不可能な理論的对象の实在性を承認するが、理論そのものを世界の实在とは考えない対象实在論 (entity realism) もあれば、成功した科学理論は、当該理論の対象が述べている事実については近似的に真とみなしてもよいとする事実实在論 (fact realism) もあり、先に触れた構造实在論 (structural realism) ²¹ も事実实在論に広く含まれる ²²。Waltz は対象实在論に関する点について具体的に言及することはないが、構造实在論の主張とは整合するのではないと思われる。

理論的对象及び現象論的法則について实在論的見解を採りつつ、理論と基本法則については反实在論的見解を採ることは両立すると考える Cartwright の対象实在論や、操作的介入可能な対象に対してその实在性を肯定する Hacking の介入实在論は、その詳細における差異を無視するとして、理論的对象の实在性にコミットしつつ、理論総体が世界の实在を描写するという考えを切り捨てるという点で共通している。そこには、対象の観察と理論とを明確に分離可能であるとする前提が潜んでいる。この点で、Cartwright や Hacking の見解と Waltz の立場は明確に異なる。

なるほど、Waltz の理論において、国際政治のエージェントは専ら国家であって、国家のパワーといった物的側面にのみ焦点をあてた分析となっていることから、その対象となる国家の实在性は Waltz において何ら疑われていない。その意味で、対象の实在性を承認する対象实在論と適合するとの即断が生まれるやもしれない。

しかしながら、対象实在論で問われるのは、観察不可能な理論的对象の实在性であって、国家の实在性が仮に問われるならば、それは科学的实在論の文脈で問われる实在性とは異なる。また常識的实在論で問われる实在性を懐疑に晒すのだとすれば、そもそも国際政治理論は始まりを持たないことになってしまうだろう。そのようなレベルでの哲学的懐疑をいかなる国際政治理論も持たないはずである。

さらに対象实在論で問われる实在性は、仮定された対象の妥当性自体が問われる構造を持っている。つまり一時的仮定として措定された対象が何であるかの説明がなされる。例えば、物理学においては物質の性質を原子核と電子の関係で説明した後、さらに原子核と電子を現にあるような関係に至らしめている条件についての探究とその説明に入る。Waltz は、彼の言うシステム論的方法として国家間のパワーの分析はすれど、国家そのものの分析・説明をその理論の対象外とすると敢えて述べている。Waltz は、科学的实在論の中でも対象实在論で問われる实在性と同様の意味で国家の实在性の主張にコミットしていないのである。

対して、Worrall または French 及び Ladyman の構造实在論は、認識論的構造实在論であるか存在的構造实在論であるかの違いはあれど、その核心は、科学理論は世界の構造について述べたものであって、構造を抽出しその正しい記述を目的とすると考えられる見解である。理論の変化に対して、変化を被る部分と保存される部分とに腑分けし、後者を構造として抽出する。強度の科学的实在論の主張は、科学理論の理論的对象及びその本性ならびにそれらの間の諸関係について科学理論が述べることはそのまま世界の实在の描写もしくは近似的に真なる描写であるとする主張であるが、対象实在論がちょうど理論的对象の实在性を承認しても、理論が直ちに世界の实在の真なる描写であると考えないのとは対照的に、構造实在論は、理論的对象の实在性の主張にはコミットすることはない。Waltz は、一時的に措定された仮定的対象については真でも偽でもないとする一方、法則的言明に関しては真偽を問いうるとする点で、むしろ対象实在論よりも構造实在論に近い。加えて、国際政治環境のエージェントの変化にもかかわらず貫歴史的に存在する構造を抽出し、その实在性を含意する表現をしていることから、構造实在論の見解に近い側面を多分に持っている。

このように、Waltz の理論は、Waltz 自身の認識も含め、多くの論者から寄せられている反实在論的な実証主義をメタ理論として背景として忍ばせているとの評価は、強度の科学的实在論とは明らかに異なるという意味での外れな評価とは言えないが、同時に实在論的な側面をも併せ持つことが閑却されているのである。

2-4. Waltz のメタ理論的考察の問題点

確認した通り、Waltz の理論は、実証主義的側面を持つことは否めないが、同時に実在論的な側面をも併せ持つ点がこれまでの評価において閑却されてきた。問題は、Waltz の科学哲学的見解がメタ理論的立場から対象理論にいかなる規定関係をもたらしているかという点である。

ある結果をもたらすエージェントの変化にもかかわらず同様な結果が生じる場合に採られる説明方法として Waltz が採るシステム論的方法は、国家の属性・意図・相互作用は説明原理たりえず、意図や属性を超えた要素が国家の行動の制約要因として働いているとし、そのシステム特有の制約要因が「アナーキーの特性」として同定するとき、ユニット分析は意図的に排除され、制約要因として一定の方向性を付与する力としても作用するシステムの構造の分析に焦点が当てられる。

構造実在論のなかでも存在的構造実在論は、構造こそが世界の原初的で存在論的固有性を持ち、物理的对象は構造の諸関係の結節点として扱われる。同じく、Waltz の理論においても、変化するエージェント自身の実在・本性・属性が問われることはなく、ただエージェントの変化にもかかわらず同様に見られるシステムの構造だけ存在論的コミットメントが見られる。

しかしながら、構造実在論がいう構造こそが原初的でかつ存在論的な固有性を持つとの見解は、構造を当該構造の担体抜きで考えることができるのかとの疑問を招く。つまり、ある領域において特定の構造が問題となるとき、当該構造は別の構造ではない他ならぬ当の構造でなければならないとする区別が、当該領域の構造の担体たる対象と独立になされうるのか、ということである。また、構造が抽出されるときは構造の担体たる対象がいわば通路として利用されるわけであって、そうした対象を通路として抽出された構造が同定された事後に当の対象は構造の諸関係の結節点に還元されることが何故に正当化されるのか明確ではない。

Waltz の理論においても同様、国際政治環境の歴史的に通観して得られたシステムの構造といっても、具体的な特定のユニットから構成されるシステムの構造が抽出されたわけであって、正体不明の実体から抽出された理論ではない。にもかかわらず、エージェントの変化に関係なく貫歴史的に見られるとされるシステムの構造が抽出されるや否や、構造の担体たる対象の分析は放棄され、専らシステムの構造の実在のみが焦点化される。

Waltz の理論の依拠する科学哲学的立場は、多分に構造実在論的側面を持ち、それゆえ、その国際政治理論においては、構造担体たる対象の存在論的固有性にはコミットせず、構造の実在性を前提にその分析が強調され、ユニットレベルの分析の捨象に帰結した。

ところが構造実在論には、ある領域において特定の構造が当該領域の構造の担体たる対象と独立になされうると考えることが可能かとの批判を免れないのに、Waltz は特定の構造の抽出を成し得たとするのはなぜか。それは、Waltz が、特定の構造の担体たる特定の対象をしか暗黙に想定していないからである。すなわち、現実の国家である。ここに構造実在論とも言い切るには「不純な」要素が認められる。つまり、Waltz の理論が科学的実在論における構造実在論と極めて類似する立場を前提に含み持っているならば、構造実在論が抱える上記問題点が潜在しているにもかかわらず、特定の構造の entity として現実の国家を持ち込んでいるがゆえに、あたかも潜在する上記問題点がないかのごとく議論が進行してしまっているということである。この点を更に確認しておきたい。

Waltz のいうシステム論的方法において、アクターの行動やその結果についての説明は、システムの構造によって見出され、当該構造は、物理的力が作用する領域に類似される。そして、構造概念は大きく分けて2つに大別される。第一の意味は、入力されるものが多様であるにもかかわらず、同様な結果を生むように働く補正装置という意味である。第二の意味は、構造は制約条件のセットという意味である。このような意味での構造は肝臓の例で挙げたエージェントの機能のように直接観察したり検証したりはできない。Waltz が意味する構造とは、エージェントではなく上で言う第二の意味の構造であった。その構造の力の理解はいかになされるのか。

先述の通り、システムは、構造と相互作用するユニットから構成され、構造とはシステム全体に及ぶ構成要素であり、システムを1つの全体として考えることを可能にするものであった。その構造を定義するためには、ユニットの特性や行動及び相互作用を捨象し、ユニットの属性から離れる必要があった。属性と相互作用を排除されてなお残る要素は「関係」しかないが、抽象化の果てに得られるこの「関係」という言葉は、理論上曖昧な意味で用いられている。すなわち、ユニット間の相互作用という意味と、ユニット同士が相互に対して持つ位置関係という意

味である。Waltz の抽象化する「関係」は、後者の意味で使用されている。Waltz はユニットが互いにどう関係しあっているかという相互作用の問題と、ユニット同士がいかなる位置関係にあるかという配置の問題は別のレベルの問題であるとしているからである。そして構造は、この配置関係によって定義される。

なるほど、Waltz の言うようにユニット同士がいかなる影響を及ぼすかという問題は、ユニット同士の配置関係の問題とは別異に扱えることを認めたでしょう。しかし同時に、ユニットの配置は、当該ユニットの相対的能力の変化に応じて変化しうるはずである。では、この相対的能力についての認識はどこから備給されるのだろうか。あらゆるユニットの属性や相互作用を捨象した上で得られる構造は、それによって変化を被りうる場所の相対的能力の認識なくしていかに理解されるというのか。Waltz の理論は、この段階で彼の立脚するメタ理論的見解としての構造実在論の抱える先に示した問題と同様の問題に逢着するのである。

ところがWaltz の理論からは、構造の変化をもたらさうるユニットの相対的能力の変化の認識がどこから備給されるのか純理論的には導出されない。この点につきWaltz が現実の国家を理論に導入するのは、専ら経験的に国際政治の主要アクターが国家であったという根拠からである。もちろん、理論的に国家に限定されることは根拠づけられてはいない。ただ、この理論的命題は「実践面からは証明されている²³⁾」とするばかりである。そして、いかなるアクターを抽出するのかにあたって、Waltz は経済学からの類推に依拠する。すなわち、市場の構造は競争する企業の数によって定義される点を捉え、多数のほぼ同等の企業が競争すれば完全競争に漸近していき、少数の企業が市場を支配していれば、たとえ多数の企業が存在していても寡頭競争になる例を持ち出し、国家が非国家的主体に及ぼす規制力ないし影響力から、国際政治の構造を抽象化する段においては、非国家的主体の存在を捨象できると考えるわけである²⁴⁾。

しかしながら、こうした「実践面から証明されている」とする現実の国家の構造担体としての定立は、もちろん多くの論者の指摘通り決して自明ではないばかりか、Waltz の論じる理論そのものに関する考察、つまりはメタ理論的考察の結論を裏切っており、寧ろ本稿ではこの点が重要である。というのも、Waltz は帰納の役割を一切無視する立場を採ってはいないとはいえ、理論的概念の構築においては、確認した通り、帰納の限界を強調する立場を採っていたからである。先に確認した通り、帰納主義的方法の限界は、我々が問題の断片しか扱えず、断片の総和が従属変数の一定の動きを説明する独立変数として取り扱えないと結論していたのはWaltz 自身である。ところが、構造の担体を同定する際に現実の国家を導入する根拠として経験からの類推と経済学における市場の構造からの類推による帰納的な方法が採られていることは明白である。加えて、帰納から推論された構造担体としての現実の国家が同定されても、あくまで構造を抽出するための通路として利用されるにとどまり、構造それ自体が抽出されて後は、担体として同定された対象が閑却されるのだとすれば、科学的実在論における構造実在論が抱える問題点をやはり同じく抱えたままに終わってしまう。そうすると、担体の相対的能力により変化を被る構造の変化も認識できなくなってしまうが、それにはWaltz は同意できまい。

また、Waltz は、ユニットの在り方やその編成は構造の影響を受けて変化することを主張していたはずであって、だとするならば、仮に現実の国家が非国家的主体を捨象しうるほど主要なアクターであることが経験的に観察されるとの主張を受け入れるとしても、Waltz 自身やほぼ同時代の我々にとって経験的に観察されるにとどまり、通時的に妥当すると帰納的に推論するわけにはいかない。この誤りは、市場の構造を企業の数によって抽出する例を挙げていることから明らかである。なぜならば、資本主義的経済システムが適用される時代区分の範囲内で妥当する議論を貫歴史的な構造の抽出の議論にパラフレーズするという誤りを犯しているからである。

3. 結論

Waltz の理論のメタ理論を提供する科学哲学的見解には、純然たる反実在論的な実証主義とは整理できない実在論的側面が認められ、とりわけ構造実在論の要素を多分に持ち、そのことがWaltz の対象理論の内容をして、システムレベルの分析に限定させ、ユニットレベルの分析を捨象せしめる所以ともなっている。先述の通り、構造実在論には、構造の特定と構造担体たる対象の独立性への疑念が持たれるにもかかわらず、Waltz が、特定の構造の担体たる現実の国家という特定の対象をしか暗黙に想定していないからこそ可能になったシステムの構造の抽

出という議論の行程には、対象を通路として抽出された構造が同定された事後における当の対象の構造の諸関係の結節点への還元の正当化への疑問を解消する課題が依然として残されているはずである。

注

- 1 いわゆる実証主義 (positivism) こそが諸科学を科学として統合する原理であるとする見解で、Karl Popper に代表される多数派を形成してきた社会科学の自然主義的把握である。対して、社会科学が自然科学と決定に異なるのは、社会科学が「意味」をもった対象を取り扱う点にこそあり、それゆえ社会科学の目的はかかる研究対象の「意味」を明らかにする解釈学的要素を多分に持つとする Max Weber や Wilhelm Dilthey あるいは Peter Winch、更には Friedrich Hayek らに共通してみられる反自然主義的把握である。
- 2 経済学と実在論との関係について詳細に分析したものは、実証主義に拘泥するいわゆる主流派経済学を批判し、批判的実在論を主張する Tony Lawson [Lawson, T. (1997)] や Roy Bhaskar ([Bhaskar, R. (1979a)] や [Bhaskar, R. (1979b)] のテキストである。
- 3 Waltz の国際政治理論が、主としてシステム内のユニットレベルの分析を捨象したシステム間のパワーの分析といった物質的な面に限局した理論である。対して、Waltz が意図的に捨象した要素を無視できないとの批判を展開する Wendt の国際政治理論におけるコンストラクティビズムは、それまでの国際政治理論において所与の前提とされた要素がいかに社会的に構築されてきたか、それゆえ当該前提には多様性が認められることを強調することから論を起す。国家の「主観的要因」の違いによって異なる世界が形成されるだけでなく、世界によって国家の「主観的要因」自体もこれまでとは異なるものへと「構成」されるのではないかというのが Wendt のコンストラクティビズムの核心である。Wendt の代表的著作 *Social Theory of International Politics* は、明らかに Waltz の代表的著作 *Theory of International Politics* を意識して命名されたものであろうし、事実、Wendt の理論は先述の通り、Waltz の理論を批判的に乗り越える意図を持って叙述が進行している。
- 4 代表的には、[Chernoff, F. (2002)] や [Wight, C. (2006)] または [信夫隆司 (2004)] が挙げられる。
- 5 科学哲学の議論で問われる実在論 (realism) とは、ある一定の記述が世界のある状態ないしは世界の中の対象物の存在及びその属性についての近似的に真であるような記述であるとする立場であって、いわば理論全体であるか当該理論の中で言及される対象及びその属性であるかの違いはあれど、それらが一定の記述の対応物となっている関係を承認する立場である。対して、国際政治理論におけるリアリズム (realism) とは、これとは全く別の文脈で使用される概念である。つまり、国際政治理論におけるリアリズムとは、国際政治状況を決定づける要因を何に求めるかについての概念であって、一般に、国際政治状況を決定づける要因は、理念や目的等の観念的要素ではなく、「国益」を追求する各々の国家群の各々の軍事力その他諸々の power 及びその balance にあると解する「現実主義」的立場を意味する ([高坂正亮 (1966)] 参照)。したがって、同じ realism との語を使用しているからといって、それらの意味内容が競合する関係にはない。よって、国際政治理論におけるリアリズムの立場を支持することと、理論が世界の描写にどうかかわっているのかという科学哲学上の問題において反実在論の立場を支持することは、realism として言及されている意味内容が全く別異である以上、その両立は可能である。ところで、この「国益」を追求する国家群という考えは、ちょうどミクロ経済学における生産者理論や消費者理論において利潤最大化や効用最大化を追求する合理的主体として観念されるエージェントのモデルと極めて類似している。事実、Waltz の国際政治理論は、ミクロ経済学をモデルとして打ち立てられている。もっとも、そのミクロ経済学の方法は、その生産者理論にせよ、消費者理論にせよ、需給理論にせよ、すべてエージェントの相互の合理的行動に還元して説明が施されているがゆえに還元主義的方法を採っているとも言えるが、このことと非還元主義的方法を標榜する Waltz の理論とどのように整合するのかという問題が別に提起されよう。
- 6 この点については、van Fraassen 自身のテキスト [van Fraassen, B. (1980)] はもとより、内井惣七による簡潔にして正確な紹介 [内井惣七 (1995)] が参考になる。
- 7 科学理論が、観察不可能な理論の対象及びその本性ないしは属性の実在性はもちろんのこと、理論自体が世界の実在の真なる描写に漸近していくとする強度の科学的実在論に対比して用いた表現である。[Cartwright, N. (1983)] と [Hacking, I. (1983)] 参照。
- 8 John Worrall の立場 [Worrall, J. (1989)] は、認識論的構造実在論 (epistemic structural realism) と呼ばれるのに対し、Steven French 及び James Ladyman の立場 [French, S. and Ladyman, J. (2003)] は、存在的構造実在論 (ontic structural realism) と呼ばれ区別される。前者が構造とその担体という二分法を採った上で、担体については不可知論的態度を採るのに対して、後者は担体の存在を消去し、構造のみに存在論的にコミットする。この点に関しては、伊勢田哲治の明晰な論考 [伊勢田哲治 (2003)] や戸田山和久の著作 [戸田山和久 (2015)] が詳しい。
- 9 [Waltz, k. (1979)] p.91
- 10 [Waltz, k. (1979)] p.73
- 11 [Waltz, k. (1979)] p.11
- 12 尤も、高い相関についての知識は、実際の見地から有益な点もみられよう。とはいえ、同程度で有害でもありうる。その害とは、単なる現象論的描写の知識にすぎないことを事象の説明として誤解してしまうことである。すなわち、統計が事象の数字による形式的な描写

に他ならず、事象がどのように作動し組織されているのかを説明することはない。

- 13 この点で、Waltz の見解は、直接経験は確実でも不確実でもなく、何事も確証せしめない旨を主張する哲学者 Charles Peirce に類似している。
- 14 [Waltz, k. (1979)] p.6
- 15 [Waltz, k. (1979)] p.7
- 16 [Wendt, A. (1999)] や [Chernoff, F. (2002)] や [信夫隆司 (2004)] または [宮岡勲 (2009)] 参照。
- 17 [van Fraassen, B. (1980)] p.39
- 18 [Waltz, k. (1979)] p.91
- 19 [Waltz, k. (1979)] p.7
- 20 代表的な論者としては、[Wendt, A. (1999)] や [Chernoff, F. (2002)] や [信夫隆司 (2004)] または [宮岡勲 (2009)] が挙げられる。また先述の通り、理論と世界の関係について、理論が世界の真なる描写であるとは考えない Waltz 自身の論述から理論に関しては反実在論の見解を採っていたことは明白であろう。このことは、何も国際政治理論における realism の立場を採ることと矛盾しない。
- 21 偶然にも Waltz の国際政治理論の立場である「ネオリアリズム」＝「構造的リアリズム」と同種の用語となっているが、当然のことながら、ここでいう構造実在論 (structural realism) は、専ら科学的事実論における意味であって、国際政治理論における「構造的リアリズム」とは何ら関係がない。Waltz の国際政治理論と立場を異にする見解を仮に採ったとしても、メタ理論として科学的事実論における構造実在論の立場を採ることも十分可能である。
- 22 科学的事実論についての学説史的整理についての部分は、van Fraassen の構成主義的経験論を振った構成的実在論として暫定的結論ではあるが科学的事実論を擁護する戸田山和久の著作 [戸田山和久 (2015)] による整理に負う。
- 23 [Waltz, K (1979)] p.125
- 24 [Waltz, K (1979)] p.124

【参考文献】

外国語文献

- Bhaskar, R. (1979a), *A Realist Theory of Science*, Harvester Press (= 式部信訳『科学と実在論——超越論的実在論と経験主義批判』法政大学出版局、2009)
- (1979b), *The Possibility of Naturalism : A Philosophical Critique of the Contemporary Human Science*, Harvester Press (= 式部信訳『自然主義の可能性——現代社会科学批判』晃洋書房、2006)
- Cartwright, N. (1983), *How the Laws of Physics Lie*, Oxford University Press
- Chernoff, F. (2002), “Scientific Realism as a Meta-Theory of International Politics” *International Studies Quarterly*. 46 (2), pp.529--551
- Duhem, P. (1906), *LaThéorie Physique : Son Objet, sa Structure*, Chevalier et Rivière
- Earman, J. (ed) (1983), *Testing Scientific Theories*, Minnesota Studies in the Philosophy of Science, vol. x, University of Minnesota Press
- French, S. and Ladyman, J. (2003), “Remodelling Structural Realism : Quantum Physics and the Metaphysics of Structure”, *Synthese* 136, pp.31--56
- Goodman, N. (1955), *Fact, Fiction and Forecast*, Harvard University Press (= 雨宮民雄訳『事実・虚言・予言』勁草書房、1987)
- Hacking, I. (1983), *Representing and Inventing : Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge University Press (= 渡辺博訳『表現と介入——科学哲学入門』筑摩書房、2015)
- Keohane, R. (ed) (1986), *Neorealism and its Critics*, Columbia University Press.
- Lawson, T. (1997), *Economics and Reality*, Routledge (= 八木紀一郎監訳／江頭進・葛城政明訳『経済学と実在』日本評論社、2003)
- Putnam, H. (1981), *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press
- Reichenbach, H. (1924), *Axiomatik der Relativischen Raum-Zeit-Lehre*, Vieweg & Sohn
- Ruggie, J. (1983), “Continuity and Transformation in the World Polity: Toward a Neorealist Synthesis”, *World Politics* Vol. 35, No. 2 pp. 261--285.
- Smart, J. J. C. (1963), *Philosophy and Scientific Realism*, Routledge and Kegan Paul
- van Fraassen, B. (1980), *Scientific Image*, Oxford University Press. (= 丹治信春訳『科学の世界像』紀伊国屋書店、1986)
- Waltz, k. (1979), *Theory of International Politics*, Addison-Wesley. (= 河野勝・岡垣知子訳『国際政治の理論』勁草書房、2010)

Wendt, A. (1999), *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press.

——— (2015), *Quantum Mind and Social Science*, Cambridge University Press.

Wight, C. (2006), *Agents, Structures and International Politics*, Cambridge University Press.

Worral, J. (1989), "Structural Realism : The Best of both Worlds?", *Dialectica* 43, pp.99--124

日本語文献

伊勢田哲治 (2003), 『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会

——— (2005), 「科学的事実論はどこへ向かうのか」『Nagoya Journal of Philosophy』4巻、pp.35--50

内井惣七 (1995), 『科学哲学入門——科学の方法・科学の目的』世界思想社

高坂正堯 (1966), 『国際政治——恐怖と希望』中央公論新社

小林道夫 (2007), 「自然科学の哲学2——フランス語圏における展開」飯田隆編『哲学の歴史第11巻——論理・数学・言語』中央公論新社、pp.84--112

信夫隆司 (2004), 『国際政治理論の系譜——ウォルツ・コヘイン・ウェントを中心として』信山社

戸田山和久 (2015), 『科学的事実論を擁護する』名古屋大学出版会

野内玲 (2009), 「存在的構造事実論の妥当性」『科学基礎論研究』37 - 1, pp.9--18

南山淳一 (2001), 「国際関係論の認識論的展開——実証主義と権力／知 (一) (二)」、『筑波法政』第30号、pp.17--55、第31号、pp.51--90.

美濃正 (1988), 「科学的事実論の問題」内井惣七・小林道夫編『科学と哲学』昭和堂、pp.213--257

宮岡勲 (2009), 「コンストラクティビズム——実証研究の方法論的課題」日本国際政治学会編『日本の国際政治学1——学としての国際政治』有斐閣、pp.77--92

山本吉宣 (2001), 「二十世紀の国際政治学——アメリカ」、『社会科学紀要 (東京大学)』第50号、pp.1--88.

Kenneth Waltz's Meta-theoretical Study and its Philosophical Critics

TSUBAI Shinya

Abstract:

Kenneth Waltz is known as neo-realist in the international political studies. On the other hand, according to a commonly accepted view, his meta-theory has been understood as anti-realism on the philosophical standpoints of scientific theories. It is likely true that his meta-theoretical standpoint is anti-realistic in the sense that the role of theory is the instrument for prediction and explanation, and therefore is not the description of the essence or reality of the world, but that his meta-theory also has an aspect of scientific realism. Scientific realism has various standpoints. In the several realistic views in terms of philosophical stances about scientific theories, Kenneth Waltz's meta-theoretical thinking is very similar with structural realism. But famously, as is the case with inability to identify the context without any words, structural realism has a same pitfall in the sense that it is impossible to identify its structure without identifying any entities. Similarly, Waltz's meta-theory also has this problem with identifying structure, and therefore, his theory of international politics has no choice but to face with difficulty in theoretically rationalizing smuggling in nation-states as units of international relations.

Keywords: positivism, scientific realism, theory of international politics, Kenneth Waltz

Kenneth Waltz のメタ理論的考察とその哲学的批判

椿 井 真 也

要旨：

ケネス・ウォルツは、国際政治理論におけるネオ・リアリズムを代表する理論家である。その一方で、彼のメタ理論的前提は、科学理論はそれ自体で世界の本質や対象の实在を記述するものではなく、予測や説明の道具に過ぎないとする反实在論という科学哲学的立場に基づいていたと理解されてきた。しかしながら本稿では、ウォルツの理論の前提には实在論的側面があり、科学的实在論の中でも構造实在論と呼ばれる立場に極めて親和的である点を抽出する。

ところが構造实在論には、いかなる語も前提しない文脈構造の同定が不可能であるのと同様に、構造担体の存在なき構造の同定の困難を抱えるという陥穽が潜んでいる。ウォルツのメタ理論的考察も同じ解決されない難点を抱え持つはずだが、ウォルツは理論的に正当化されていない現実の国民国家を特定の構造の単位として密輸入することによって当該問題を回避していることを明らかにする。

